

「宮城県を元気にする高知応援隊」に参加して

(株)第一コンサルタンツ 調査一課 鍛治 清史

6月16日(木)

午前11時、柴田さん、山中さんとガイアに乗り込み、遙か彼方の仙台宮城ICに向けて会社を出発。

約1,200kmの行程を3人で交代しながら進み、道中は短いスパンで休憩を取りつつ、ハイテンション ローテンションを繰り返しながら和気藹々のドライブだった。高知道から瀬戸大橋を渡り、名神高速を経て夕方には北陸道に入った。真夜中には磐越道に入り、この時点で全員のスイッチは「OFF」の状態だったため、交代で仮眠を取りながらほぼ無言の状態で走り続けた。途中、無理矢理スイッチを「ON」にするも長くは続かず、眠気と格闘しながら磐梯山に着く頃には空が白み始める。

東北道に入って翌朝7時頃、無事に仙台宮城ICに到着。風呂に入って汗を流すも、疲れを洗い流すことはできず、皆、2,3歳は老けた顔をしていた。

6月17日(金)

午後1時に仙台駅東口代々木ゼミナール前に集合。バスに乗り込み被災地を視察。

大きなハエが目立つ中、多賀城市を車中から見て回る。至る所に瓦礫やひしゃげた車が山積みされていた。時折、大型のタンクが転がっていた。あらためて津波のパワーを思い知らされた。

七ヶ浜町ではバスを降りて見て回った。しばらく言葉を失う。テレビで何度も見た景色ではあるが、心に感じたものには、また違ったものがあった。視線を海に向ければ浜にはひしゃげたコンテナがいくつも転がっている。反対の内陸に視線を変えると上物を無くした家の基礎部分と瓦礫の山。へし折られた木の根本。鉄骨

と外壁が若干残った建物に布切れ等が絡みついた姿がより悲惨さを感じさせた。少し遠くの高台には無事に残った家々。明暗を分けた状況に心が痛む。

町の至る所に避難所の方向や距離標が設置してあるのには感心した。高知で僕が見た限り、避難所の場所を示したごくごく一般的な看板のみなので、常に目につくよう道路への記載や標識を設置すべきである。

余談だが、2003年に韓国で起きた地下鉄火災事件を教訓にある実験を行った記事を読んだことがある。部屋に一般の成人を数名集め、人体に無害な臭いをつけた煙を室内に流し込んだところ、誰も逃げなかった。人は今までに経験したことが無い状況になった時、周囲の状況と同調してしまう心理が働いてしまうらしい。心の中では「おかしい」と思っても、周囲が平然としている状況において自分だけ異質な行動を取るのには「恥ずかしい」という心理も働くようだ。この心理は僕も納得してしまう。

この記事では、子供の頃から何かあれば周りには気にせず自分だけでも逃げるように徹底して教えるべき、それが引き金となって周囲が逃げ始める効果もあると締めくくられていた。

高知に来て半年が経過するが避難訓練に参加した経験はまだ無い。皆、避難所の場所や距離、所要時間を把握しており、「逃げる」ことへの意識も高いことに期待する。

夜は地元の方々より手打ちそばを含めた豪華な夕食を振る舞っていただいた。入浴と翌日の炊き出しの打ち合わせを行い就寝。合宿の雰囲気。

6月18日(土)

炊き出しのため南三陸町チームと気仙沼チームに分かれて行動。僕は気仙沼チーム。午前8時半、全員、今回の企画で作成したTシャツを着込んで宿泊施設を出発。前日の視察バスに比べて大型のバスで移動。視察バスではすし詰め状態だったため、いろいろと文句を言ってしまったが、気仙沼への陸路において、バスが大きいがために被災した道路を進むのに難航。対向の乗用車やトラックにバックしてもらった光景を目にし、大型バスに喜んでしまった自分に反省。

約1時間遅れて気仙沼高校に到着。急いでトラックから荷物を降ろし、資材を設置。なんとか12時少し前には炊き出しを開始することができた。皆さんカレーやから揚げをたくさん取りにきてくれたことはものすごく嬉しかった。カレーに添えるらっきょうがおいしいと、らっきょうのみおかわりにきたお婆ちゃんには思わず笑ってしまった。ただ、リープルは皆さん目にするのが初めてで、引き気味の方が多かったが、「高知名産」と一言添えるだけで反応は180度変わった。炊き出し終了の合図とともに後片付けを開始。遅滞なく片付けができたメンバーは素晴らしいと思う。

その後、よさこい鳴子踊りを体験してもらうため避難所となっている体育館へ移動。ダンボールで仕切られた状況を目の前に一瞬ハッとした。僕はこのダンボールで仕切られた空間での生活に耐えられるだろうか。すぐに笑顔を取り戻し、皆さんと一緒によさこい鳴子を踊りながら楽しい時間を過ごすことができた。

踊る前は恥ずかしさもあったが踊ってみれば物凄く楽しかった。短い時間だったが大きな満足感を得ることができた。

生活物資は充足している様子だったが、梅雨に向けて必要な物資があれば届けたいと思っている。ただ、個人からの物資の受付は終了している避難所がほとんどである。

最後に、カレーを2杯食べてくれた男子学生とハイタッチで別れ、バスに乗り込む。子供達が鳴子を両手で振りながら笑顔で見送ってくれた。子供は元気だ。僕も小さな事で悩んでいる場合ではない。

南三陸町チームと合流後、宿泊施設に戻る。夜は前日同様にバーベキューを振る舞っていただいた。その夜は地元の方と交流を深めることができた。お互い呂律が回っていない状況の中、意気投合し、僕は着ていた土佐人魂Tシャツをプレゼントした。

6月19日(日)

午前8時に宿泊施設の前で解散式。涙ぐんでいたお母さんにもらい泣き。感謝してもしきれない思いを込めて地元の方々と握手で別れ、ボランティアを行うため多賀城市役所へ移動。一般の方々と一緒に受け付けを済ませ、僕は大代地区公民館の掃除に参加した。

大代地区公民館には津波で流された写真やアルバム等が保管されていた。生まれたばかりの赤ちゃんの写真を目にしたとき、この子は無事だったのだろうかと涙ぐんでしまった。

思い出の品々が乗せられたテーブルを一旦隅に寄せ、床をブラシで水洗いし、水をかき出し、テーブルを並べ戻した後に壇上を水拭きして終了。

午後は急遽、一般のお宅の瓦礫撤去を行うことに。先行で作業されていた13名の方々と合流し作業を開始。手際よく出される瓦礫の入った袋や土のう袋を一輪車で集積場まで運び出す。ふと周りを見渡せば、津波で破壊された家々や、家の区画のみを残す地面。その中に2軒並んだ家があり、片方は津波で流されてきたらしい。よく見れば片方には家の基礎があるが、もう片方には家の基礎はなかった。津波のパワーに鳥肌が立つ思いだった。作業終了後、多賀城市役所に戻り、余った防塵マスクや念のため持参した耐油ゴム手袋を寄付して市役所を後

にした。

この日は仙台市で一泊。今回は県外からのボランティアが多かったようで、たまたま前に並んでいた2人組の男性が県内の方らしく、県内からのボランティアが少ない点に嘆いていた。これも1つの現実。

6月20日(月)

新幹線の時間まで松島を観光することに。松島海岸駅から観光船が出る港まで様々な店が並んでいるが、壊れたまま手付かずの店、修理中の店、営業を再開している店、様々だった。途中、1軒の土産物屋に入って目にした写真には浸水した店内や全てが流されてしまった陳列棚の状況が収められていた。それからここまで復活したことに対して『人間ってタフやな』と思った。

最後に

今回は非常に良い経験をさせてもらった。今の僕ができることは有事の際、率先して逃げる事だと思っている。同じアパートに住む人たちを逃がすことができると考えている。

また、できれば再度ボランティアに行きたいと考えており、神奈川や千葉の友人・知人にも声をかけてはいるが、反応は今ひとつ。悲しいが強制はできないので現実として受け止めている。まだまだ被災した家は残っている。可能なら1週間ほど会社を休んでボランティアに行きたいと思っている。